



第10回目 勤務助産師部会「わいわいカフェ」

日時：令和4年8月21日19時～20時/テーマ：「コロナ禍の学生や新人教育について」



《プログラム》

1. 開会、オリエンテーション
2. 自己紹介
3. 意見交換

《連絡事項》

- ・兵庫県助産師会「助産師のちからアップ」の研修会は、9月～開始。
- ・次回カフェは10月2日（※詳細はホームページをご覧ください。）



《意見交換》

- ・コロナ禍の始めは、できないことに着目していた。しかし例えば面会が出来ない母の気持ちを知るなど、**コロナ禍だからこそその学生の学びがある。**
- ・**ケアの意味づけが大事。実習はないと困る。**現場では同時に物事に起こったことに対応していかなくてはいけない。また臨床現場とペーパーペイシエントでは、データを分析する過程や思考が違う。
- ・臨床現場での実習で、**ケアは患者中心であることを学んで欲しい。**ケアの方向性やポイントなど**助産師のわざを学生に感じさせて欲しい。**
- ・臨床のスタッフは、先に学生に説明して欲しい。そして、事前の状況から変化したことは、その都度、学生に説明して欲しい。
- ・実習生が出来るだけ体験し、**実習生と臨床スタッフのお互いが惜しみなく話して、**伝え合わないといけない。実習生が臨床スタッフについて実習するという「**かるがも実習**」がある。お互いがコミュニケーションをとることが大切である。
- ・指導は、自分がされたように指導する。しかし、その指導方法には時代の差がある。
- ・**ケアする人として、学生と臨床スタッフが対等な関係を持って欲しい。**
- ・**学生を名前と呼んで欲しい。**臨床スタッフが学生に「ちょっと待ってね」と言って、学生が待たされたままのことがある。このようなことから学生は臨床スタッフから尊重されていないと感じる。
- ・病院勤務をしていた頃、お母さんは助産師に「教えてください」と言っていた。開業をして、助産師と母で上下関係はなく、「一緒に考えていこう」と話している。
- ・実習指導者として学生に教えなくちゃいけないと考えていた。**学生をパートナーとして**捉えていなかった。これからは、学生に対して、もう少しフレンドリーに話すこともしていきたい。また、内診のタイミングなど、どうする？という問いかけをしていたが、自分はこう思うと、自分の考えを学生に事前に伝える方法も取り入れていきたい。
- ・年々、実習内容が変化している。リアリティやコミュニケーション力が下がっているが、学習や思考力は上がっていると言われている。そのため、**看護技術は丁寧な説明が必要**である。「考える」「実践する」「伝える」「リフレクション」を心掛けている。そして集合研修ではなく、「OJT」をして困ったことを話し合うようにしている。
- ・臨床側は教員の引率が必要と言う。実習前に教員との目標の共有は必要である。しかし**本当に、教員の实習引率は必要であろうか？**